



# 魔女ツ子 & ラムズフェルド

田所千汰

*Denshosenta*

## 焼きイモリ in the cookie

わたしの部屋の壁には、数カ所蜘蛛の巣状にひびが入った鏡が掛けてある。割れた部分が一つ一つ別のわたしを映し出して、そこだけ見ているとお伽の国のような、ちよつと不思議な気分になる。

これは、ママがくれたものなんだけど、鏡って本当に真実を映し出すものなのかしら？ わたし

は違うと思う。鏡に映ったものは所詮まやかし。わたしたちが勝手に真実だと思いこんでるだけ。そんなことをこの鏡に教えられたのかも知れない。

「鏡や鏡、世界で一番美しいのは誰？」

「堀○真希です」

「それはあなたの趣味でしょ？ 真実は違うはずよ」

「違います。真実です」

「……うそ！ 本当はわたしでしょ？」

「………」

「粉々に割るわよ」

「そうです！　実は“あなた”だったんです！

立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合の——」

いざ喋るとなると見え透いたお世辞ばっかし。

ほんと腹が立つ！　聞いたのが間違い。こんなバ

カ鏡に付き合っている暇はないんだ。わたしには

やらなきやならないことがある。クツキークツキ

ー♪

初めてだからか、これ、なかなか難しい……。

うえっ、バターが混ざらない……。

「お、なんかいい匂いしてんじやん」

悪戦苦闘、どうにか焼くところまでたどり着いたら、目ざとく、鼻ざとく？ 黒豚のラムズフェ

ルドが嗅ぎつけてきた。黒いというだけで魔女のペットに応募してきた厚かましいブタ。でも、ママのお気に入りだからあんまりイジメたりは出来ない。

「食べちゃ駄目よ。これジュンくんにあげるんだから」

黒豚は鼻をならしてブヒブヒ声で、

「え、マジ？　わりいこと言わねえからやめとけつて。あんな奴よりおれに食わせるよ。おれの方が飢えてるから」

「ダメだよ。ブタさんにはあとで臭い餌作ってあげるから待ってて。——…：…：…なんでやめといとほうがいいのよ？」

「ブタって言うな。——だつてジュンくんつてあのイケメンで他の学年から人気なジャニーズ系いい男だろ？　魔女ツ子には無理だつて。おまえ

性格もひねくれてるし。堀○真希くらいかわいくなきや駄目だな。魔女ツ子にもらったクツキーなんか毒でも入ってんじやないか、って捨てるぜ、きつと」

うわっ、ブタ、容赦ない。普通そこまで言わないよ。

「ブタ、焼くよ。あと、魔女ツ子って言うな。わたし、もう高校生よ。——でも、心配無用。わたしにはちゃんと秘策があるんだから」

「秘策ねえ」とため息混じりに呟きながら、黒ブ

夕は机に置いてあつた紙切れを蹄で起用に挟んで、

「ん？ なんじやこりや？ クツキーの材料表か？

……— 焼イモリの粉末つて、まさか——」

「そう、惚れ薬の調合表」

「げげっ！ しつかり毒入つてんじやねえかよ!?

だいたいマホ倫の規約に著しく反して——」

「かたいこと言わないでよ。規約なんか律儀に守つてるようじやちつとも〃魔〃じやないでしよ」

「……知らねえぞ」

ママさんがいないことをいいことに、とかなん



とか、ラムズフェルドはぼそつと言いながら去つて行つた。あつち行け。じやまじやま。

渡しちやつた！ わたしつて意外に大胆。放課

後廊下でジユンくんを捕まえて、震える手で渡し、そのまま走つて逃げてきた。二階の自分の部屋に飛び込んで制服も脱がないままベッドに潜り込んだ。まだドキドキしてる。大成功じゃん！ あとは彼が食べてくれるのを待つだけ。早く食べないかなあ、待ちどおしい！ 昨日がほとんど徹夜せ

いか、わたしはいつの間にかうとうと、そのまま眠ってしまった。

——ガンガン——

「魔女ツ子、いるのか？」

ブタのラムズフェルドが廊下でブーブー言っている。ひよつとしてジユンくんが来た!? わたしはベッドから跳ね起きて、勢いよく部屋のドアを開けた。

「なんだよ。いるんじゃないか」

「ラムズフェルド、ジュンくん!？」

「……はあ？　寝ぼけたこと言ってるじゃねえぞ。  
まだ着替えてもないのか。早く晩飯作ってくれ。  
飢え死にするぜ」

　　まったくママさんがいないとこれだからやってられねえ、などとブタはほざく。自分でも焼いて食べ。

　　とは言っても、わたしもおなかが減ったので、ご飯を作るついでにブタの餌も作ってあげた。

　　わたしはいつジュンくんが来るか気が気でなく、

落ち着いてご飯が食べられない。

一方、ラムズフェルドはそんなことお構いなし。餌にがつつきながら、

「クッキー盛ったんだろ？ どうなった？」

「うん。もうそろそろわたしに飛びついてきてもいい頃なんだけど遅いなあ。——盛るって言うな。潰すよ」

「惚れ薬半日たつても沙汰はなし、ってか。おお、くわばらくわばら」

——ピンポーン——

ジュンくんだ！

「はいっ！」わたしは駆けだして、玄関の扉を開けた。やっぱりジュンくん！でも、手にわたしが上げた包みを提げている……。

「ごめん。さっきは突然だったんで受け取っちゃったんだけど、おれ彼女いるんだ。だから、君の気持ちに応えられない。ほんとごめん」

気まずそうにクッキーを返すとジュンくんは帰って行きました。

わたしはドアの前で呆然と立ちつくす。

ブタがこつちを見ている。バカにしたいならすれればいいわ。

「ま、元気出せや」

ラムズフェルドは優しく励ましてくれた。そういえばラムズフェルド、クッキー好きだったよね。

「食べる？」

「いらない」

夕食もそのまま、傷心状態でわたしは自分の部屋へ戻る。ベッドに腰掛け、包みを開けてクッキーを取り出してみた。ほんわりバターの甘い香り

がするよ。——変な薬も入っているけど、愛情だ  
って一杯入れたのに……。悔しくなつてわたしは  
思いつきりそれを投げた。ちようど鏡に当たつて、  
クツキーは飛び散つた。

すると、突然鏡が、

「あなたこそ全宇宙で最も美しい!! 立てば芍薬  
座れば牡丹、歩く姿は百合の花、沈魚落雁閉月羞  
花、小野小町も裸足で逃げ出す! わたしはあな  
たに惚れました」

## 指輪の物語 The Lord of the Ring

わたしが居間で雑誌を読んでいると、黒豚のラムズフェルドが空腹そうな目つきで寄ってきた。

「……なんだか嬉しそうだな」

「まあね」

「なに読んでんだ？」とラムズフェルドは下からのぞき込んで、「はあ、サッカー？ おまえサッカ



「なんかに興味あったんか？ あ、でも、これだけワールドカップワールドカップって騒いでりやな」

「ワールドカップ？ 全然興味ないよ」

「……じゃ、なんでサッカーなわけ？」

ラムズフェルドしつこいなあ。しようがない。

教えてあげよう！

「……実は、チヨーかつこいいサッカー部の先輩がいて、ちよつかい出してみたところ、なんと、次の試合で勝ったらデートしてくれるということ

になったのですっ！」

「えっ、マジなの？ おまえの高校のサッカー部  
って強かったっけ？」

「ううん。最弱」

「……だめじゃん」

「バカ。わたしを誰だと思ってるわけ？」

「魔女ツ子。……うわ、最低」

ブタは軽蔑したように吐き捨てた。

そりゃ、わたしだってこういう方法が最善だとは思っていませんけど、仕方ないじゃない。友達

に聞いた話だと、うちのサッカー部は勝ち知らずで有名って話だもん。

「でも、おまえの力でピッチまで届くわけ？」

「指輪使うわ」

「そういうことに使うか普通？」

バーカ、と声に出さないで、口の形だけでラムズフェルドは言うのと、自分の小屋に戻っていった。

こんな太平の世、こういうことに使わないでなんに使えっていうの？

試合当日。わたしは深めの帽子と伊達眼鏡という出で立ちでやってきた。サッカー部を応援する学生たちに紛れて観客席の一番前まで行く。

高校生の、しかも弱っちいチームとの予選第一回戦、見事なくらい客がない。どこだつて空いてて座れるのに、なぜか、ま隣に同じクラスのアツミとヨシコが座った。こいつらはバカだから、わたしの正体バレないとは思うけど……。

「ねえねえ、ヨシコ、隣に座ってる奴の指輪見ても。超ダサイ。ウゲって感じ。指輪すれば可愛い

とか思っちやつてるんじゃない？」

「センス悪いというよりも悪趣味。帽子で顔隠してるけど、きつとドブスだから。ハハハ」

ムカツクーっ！ アツミとヨシコはひそひそ話をしてるつもりらしいけど、余裕で聞こえてますから！ そりや確かにこの指輪は何百年前からあるもので、ごついし、お世辞にも綺麗とはいえないけど、なにも、持ち主までブスにする必要はないじゃない！ あなたたち、おぼえてなさい。魔女の意趣返しがどういふものかこんどゆっくり見

せてあげるんだから！

って、いつの間にか試合は始まって、もう一点取られてるし……よわ。と呆れているうちにまたピンチになってる——やばい、敵がシュート打った、危ない！ と思った瞬間、魔法を発動させて、ボールの軌道が無理矢理変えちゃった。スタンドからどよめきが起こった……。

「ええー、今ボール妙な動きしたしー」

「完成の法則ガンシカトだね」

とアツミとヨシコ。

その後もわたしは魔法発動させまくり。無理矢理二点押し込んで逆転勝利にしてしまった。イリユージョンだとみんな大騒ぎ。ホント新聞社とか来てなくてよかったわ。

で、早速翌日、先輩とデートすることになりました。でも、二つ問題があります。一つはデートの場所が秋葉原ってこと。別に秋葉が嫌いってわけじゃないんだけど、初めてのデートでっていうのはどうかと思うのよね。で、もう一つは、指輪

がとれないってこと。ラムズフェルドは、「手がむくんでるだけだから寝ればとれるんじゃないやね？」とか言っというて、全然とれないし……っ！ あのブタは帰ったら締める。ポケットから手出せないな。

電気街口の地面にも萌え萌えの絵が描いてある改札で待ってたら先輩が来た！ 侍ジャパンのユニフォーム着てるし……、ってか上はいいけど下までユニフォーム穿くなよっ。先輩はアキバ系ではないらしいですが、ここへはよくサッカー漫画を買いに来るそうです。今日もそうみたいです。



かなりのサッカーオタクです。今もワンゼグでサッカーの試合をご覧になってます。わたしと話してくれたのはハーフタイムの時だけ。それもサッカーの話題。

「いやあ、昨日の試合。あれ、マジで神の力を感じたわあ」

神じゃなくて魔女なんですけどね。

先輩はお目当ての漫画も買ったし、駅に向かっ  
て、人でごった返す細長いビルの谷間を歩いてい  
ると、外階段の踊り場置かれた、ちよちゃんの等

身大人形によるけて腰をぶつけた奴がいた。ちよちやん人形はその小ささから、手すりの柵をすり抜けて、五階くらいの高さからまっすぐ人々の頭上へダイブした。わたしはとっさに魔法を発動させた。ちよちやん人形は万有引力を無視して静かに地面に降り立った。

あはは、先輩にバレちゃったな。結局インチキなんかするとうまくいかないんだよね。先輩、ごめん、って先輩を見てみると、

「ロナウジーニョ!!」

ワンゼグに見入って絶叫してました。もういいです。こっちから願い下げです。



電子書籍考察センター

---

まじよ  
魔女こッ子&ラムズフェルド

2011年7月13日 Var.1.00

著者 でんしよせんた  
田所千汰

発行所 電子書籍考察センター

電子書籍考察センター ブログ <http://blog.livedoor.jp/denshocenter/>

ツイッター @denshocenter

---